鸚鵡言

志を多川新の物語

全

伊藤文庫
301

東京帝國大學圖書館

讀鵾鵾言

鵾鵾言者白川主源君所著之書而國家為治之要也嘗聞之孔子曰政者正也其身正不令而行益子亦曰君正莫不正一正君而國定矣夫治國家者先備己而後可以定人也今見此書遠師法性聖道敢嘗於已其說卓然明白矣所謂正己而物正者也余甚嘉尚焉其源君為政日新日日新多且此書之為作何以鵾鵾言是作者之謙乎余惟有言者其德乎如是書之言日日新焉則用之邦家推之天下則難之有在是在曰政事日新者乎余不敏敢註所懷耳

宣條草

天職之事

天下之民を治るものは天君を為て治めしむ天君治て諸侯諸侯治て大夫の命を受て治る民は天の民にして君の為に其德天職に於ることなれば敢て私事を用て天民を治ることなかれ天職を出しせば天を慢て人を侮ることなかれ天職を知て人必德器備るものの人なるの子孫なり主たりて主たる

皆聖人にして何れも祖宗の法を遵守し給へれば天子の
祖宗の德によりて其人を尊敬し給ふこと
これ天の寛仁を称し給ふ大君の御德也
て其祖宗の餘光やいかに四海を恩澤に浴
ひて其祖先の餘光をもて万人の上に立て位
隆重を得し事も天に對して恥ざること
德をつゝしむ事
德を恵心を行ふを以て主とする故なり恵心は
天理に法ひ天理を以て人德をつゝしみ出ス故也
日新の功を積ム事ハ聖人の德なりとなす
此道理を下ハ那さ所にして自ら
其の德いたしてはなすこと
の書は法をそれを学ぶ為なり
書は法をそれを学ぶ為なり
書は法をそれを実用をつとめ
ることを以て
是ハ
是らをしてその德の全きを
賜ふ君の社稷を
賜ふ君の社稷を
ことをしるべし
學問之事
此今書を以て四書経を大学衍義

六日本地史地図録を論ずる世達へし結果
の集成外書大学或問数学問答の類の新
よりて所書家の事書こと書はた紙上
出ずに毎へらる書はなし一生其学を
以てなり

一 情の事

天地の間人民の信ずして親地をうるべし
地産をなすべくなるべく君臣交際
をなすべくなるべく地をなすべし
本性生ずべきあり以て第一番
なるべきなり君臣交際の安く治る
ばかりなるべし君臣の安く治る
其のなる医者上に向て機
おのづから陽絶して上下の情
なる世界のなるべし
上聴を得ずして
とい下の人の情
なれば人の求の
安逸を甚
及ぶべきあらず
為き者の
諸人下の

さしへ城あるにくあるも等なるは心の縦に行より
れる事なるやし此は本の字城釋し出
るとも上の字城へ川之世ハ下の字を去りて
下の字城之世ハ去りて上の字を去るへし上下地
何よりそ性情を通る城も中の字ハ口城
此中よ尹矣くさ元有なれ

君臣の事

撥乱の君ハ修乱と君の臣ニ言ハ君之能(?)
於てはなる心にれとも此安さ危ハ二れらそり
徒すとも以為事やねかしれその心くりなきへなく
す人をさハ二世人君臣之ら二語する耕して守る
ふ為し撥ハ君たりとへいふも臣とハ不ぬといへハ
まことし君臣もと同しく人へ生とその祖先の
世を後しきしより下て其君と共し臣といなり
彼れつら桶の為在たて出来る事しきな事(?)
去ハ大人個も生て人の子なりとハ不能之し

賢才之事

賢宰芋(?)ハ賢を求るハ聖賢の事と自らの教学
これ聡ハ王道のもくいもん流し為る者之大王や
世しとハ以為ハいへそ賢才の国を治めうへと
万世と為人ハ出智はもとと為せし如安心あるか

なくてならぬ物ゆへ人に思はしむへし人の心面の如く
そなれハ君臣合体といふハ道のあるゆへ也然ハ
て君の心を察して臣の心を能く相合する故
にあらハ其の晏子のいへる和と同のことし
羊羹甘味をとゝのふる如くにてよく味をとゝのふ
是和といふと其甘をもて甘を和し羊羹も
羊羹和すれ共ハ和すれ共同といふと其同する
人ハ好悪をしたかふる人をいふ君大ハ利口
相称する肉にハ必其人ハ皆しくあるものなり
いつくしき事すこしものゝわかれ深くハ存なす
然るに為にハ人をも皆しく人を任するハ
断者の心をもて其をしるへし事よくも可心得
しるすものハ其の人の才をもちゆへし

祖宗と法との事

祖宗の法ハかするものなり作家の風をもて
法といふハ作し其風ハ其を用て之を法と云事
ありその法を専らとせしハ其心を存て行なひて
我の其道を存法となし人ハ黄鐘南呂の調子
ハ皆其律をもかはらず其の来の趣が根を継
る也琴の師此と教し調子ハ声の才して根をなす
きに祖宗の法ハ黄鐘南呂此の云ふ
その後急なる根をつかしめ

とく相宗の法を起すに自宗を立て他
宗一切を破し人の心を惑はしめて
なし安国論に相きらし主安国の邪法のとき時
悪鬼入りたもつきらに仏法を捨て其法に入れば
国土に乱しく門弟に命じ山に行しめ
海と川に行て石渡に橋の柱に流
されしと云へる御書論に仰せなる事
なるを思ひ出て此法を捨て山に行
命を川に捨れ山に捨れ川に流れんとせし
あり概なるを以て服せず終に
他の流罪に遭れ終に佐渡に
いたりて法を捨て蓮華の
心の底をたずるの深きを
天に達して法を捨て蓮華の
を以て法の縁を以て
法華経と事なる事

物の法にまさる所の法なし事の悪しきや如
形の悪しき用の世文化の文を同者にしたがへば
法華は其文化のごとく国つ国
微弱なれども日蓮の邪を捨て楽無成悪魔
しに法華経の縁を生しも者の世に法

後の世をひらきしといふ人なし漢の光武はなほ
その子をこそあはれみ給ひ佛を拓き給ひ
教の法をもひろめ給ひ功臣に封爵をたま
ふ開国の後はもはらこれらに力をつくさしめ給ひ
しかるに高祖ときに光武ともに用ひ給へる輩
ども漢の末に叛き奪ひて世をうばひ
国を亡ぼし終に劉氏の子孫をして劉氏
を亡ぼしめ其中を立て劉氏
を主とせしかども天下ふたたび
ひろまれり是世を治むる法なり
然れども漢の末に叛きうばひしかども王氏の威
天下をうばうまでに強盛の代なりしかども
ひろまる威をもつかりなりしかども其末
ぶ耶僧に行なはしめ制しかたし蓋しこれ
なほこれ高祖光武の英雄なりしかば
しかるに高祖の英雄なりしかば
しかしかれども王莽の威を奪ひしかども
故なきに奪ひ奪はれしかば
世祖のよきをもとめ給へる人
世祖も世・世世世世世世世世世世
いかなる人か北魏の孝文帝
なりしかども用ひ給へる人なり

されども世に知られざる事多し晉の代
に至りて耶律德光の制したまふ所なりと
雖ども世の人多くは世間の乱れ
ゆきし時代の行はれたる風俗
清淡にして不拘束なる菊北の代いまだ
風のうせざりしなり
行はれしこと隋の代に至りて
春秋の時代にまかせ
四のうちに
なるべし唐の大業、明皇
ちゆ中ごろ
かりしはじめより
源を
城郭と
で
人
代
根
うに
宋の世いまだ規模

して微弱なるをもりて海内の隅のこゝろ
無きもとゝ云ひすべきもとゝ
しい五胡の乱を始めとして
人情なほ何ものとられい
こゝろ法の
風俗
風俗なるものゝ
先王の四時
先王の
其の
実を
如何
忘れ
たゝ
しかも
禮
禮
禮川の堤のもとゝ

この法みやこをもさきにるべしはかりし光堅
り性にて行人の見まのうちに其をなるのち光
とも云ふ世にて其川に水落しこまし悦の
かるべうるき村里の人ふるこ宮をつくりうち
のりて法みのうるおやすしこ愛心地をも撰定
やをきとを毎に心くなきこをこ月ら三寸悦の
水のひらきれぬのこをみるくに水きこを稲い数千人
の生業を生ニ寸れ去のなあこを川これをとての日
りあり法るし去のうなるかをまるを有されい
法母を去の祈れその何ーこをこ城制より紀
ヨ行ふるそ行ふるを年申化生業これ
みるつ十を生をを今世伝くの膳を見て
のりー他人をめし法れなるしれ中ーの
里て大路をを迎ふこ美味かるつこ有ても美名
目を宮ていも心をういるきを面い禮のつみなるて
し伝ニるかるを衣をを芝をを略して
大路をを迎るに家陸あるを行くはなりてあくに
義良なる所あいり迎るまてを尼迎るへしれい
其禮をあ去いをを芝をを芝をを芝を
るをなるれ云ふをを新を禮い仁ぬい
なるの目をれ今兵衛を従ひて大路をを迎をは
四旬の国をなを〜このなを比情をを家著を

向て一生涯の楽いとなるべし礼いかなるものか
為に教るや其礼を以て礼をつくすべし
とまうしし其儀像三百威儀三千おのずから
皆のうちとそなはれいたりて後儀式といふなり
し様ふるまひる心をもれ林教の本とひそ
大武の為なるもたりされたり

樂ゝ事

鳥のなき虫の性うめくれきみゝ人花和
らぎなしむとなりそなりなる世やきもとそ乐
しかるのうしもなしこゝにおのつゝ心の感ず
世間浪花仇波とゝ者なるゝ花波樂の
中にも淫曲てうあいるゝ小様世そうゝ勇
里巷のうゝ八無度ゝてうたるゝ其ゝそ紀
ゝよりて心のゝ為をつくされゝ樂の大意
ばう華音ゝ八たゝ天地の中ゝ生し
八五行成陰ゝ五行ゝ五常ゝ五音なく
ゝ人百義ゝ生ゝ人ゝ沒なりゝ五音
ゝ五ゝ五常ゝ五音ゝ天地陰陽の
外者八芝地陰陽ゝ水火様八其本
とゝ化ゝ生ゝ鐘鼓の音ゝ生ゝ

政ゝ教ゝ人情ゝ陰ゝ事

かゝ為ゝ為ゝ政ゝ八有為無

然るをされどもかく有といふは人情之されどもかく
何事ハかゝれバといふは政事の理をもつて救
甚き人情を以て政を為すハよけれども知ぬ
きはまりもなくなるハ人情之甚ハ萬事なれハ事なる
事なるハ縦令ハ軍事を以てハ理之無き衣食
食などの事されといふハ土地之上の人ならぬ衣をさへ
ならぬ衣をこのむ奢侈を誡めるの甚き
制度を定めて貧富ひとしくなるハ政之要
渊ら以つる嫁婦の嫁をするハ為して嫁なる
を政なりといはぬ知音もやすかるへし

政之事

政は正文を書て正しき理なりして則直し
能ありそれよりよくひとしくなすなす能
く政といふハいふなるに数の政を施し寛猛の
時に應ずる也寸の有なるの宜寛猛異
攻とふれども聖人世成めくむの行ふ
生ふされハ秋の書報ハ仁の書報みして春成
為て萬生し生をやすきるゆへといふなるとし
その政は時と勢と位と成ものあらば戒言
然ハ其いるりを何くふをもて行となん注
戸みてハ基いたとしその為しまた時が為
治ども件時を陰し長乱を治されハ何事也

平江郡まで、まと成ぬ。物を見ては、何でも好くまねばならぬと思ふ物を見て、
心に得られぬ所を、時に成て物を見ては、
なほ昔より上手と成て、本を忘れ、
空し地にて、いまだ何ぞ、
登りて四方の指を下視して、
九天を望む。
の石の如き、
八幡宮、
其人を、
の指さす方に、
立て、
鯨の吹き出す潮、
のかなたに、
とは、
本所を知らず、
予が、
八剣用を、言ひ、
えんの高鉄、
こそ、
もくれ和ひ、

平江郡まで、まと成ぬ。物を見ては、何でも好くまねばならぬと思ふ物を見て、
心に得られぬ所を、時に成て物を見ては、
なほ昔より上手と成て、本を忘れ、
空し地にて、いまだ何ぞ、
登りて四方の指を下視して、
九天を望む。
の石の如き、
八幡宮、
其人を、
の指さす方に、
立て、
鯨の吹き出す潮、
のかなたに、
とは、
本所を知らず、
予が、
八剣用を、言ひ、
えんの高鉄、
こそ、
もくれ和ひ、

世の中に多くもの小御所に参内なれ
ば免ぜ用法多の功なしかくしかいふと御と
いひ出とて本は徳を徳をもて戦ひ庭
潦の如の恩を施すうつし時思の下民極と
そなへ人毎のときに毎あまねきを感ずるものは
いかなれば御所御所を設けて世道ひまるべ
しとなり

任官之事

関禅を乱民に書を与へ公家を分
て其を以て地を理し侯を保して信を論せざる
制を生ずるなり[illegible]
此の法とまるべき左の官を分ず前の役法を
なすべき車の輝は鞦韆輪轅轅鞦韆用
四人なり輪轅轅鞦韆前と同じて事となれ
るまるべし[illegible]人とするとして事の用をいなき
ず此の四つのものの用はおのおのとなれども車の
用をなすは一つとやもとん左右荷駄北の位と
を保とし法の品[illegible]なるは一つとやもとん官好
れば[illegible]なれば[illegible]なれば[illegible]
時と変とは[illegible]

賞罰之事

養とい心養として血脈を養ひ形を以て形を
以て滋をつぎ人やはらかあるを養ふ養
生とまことを養うためにあるとの所を養
形骸を飾るものにくらべて養生
なんぞ生を行ふ道

生財之事

金を暴て生ずるを財なり経濟の事に倹約
費をもつて生ずるを財なり
物を入て吸ふ出て陽にして呼を陰陽
天の道にして呼吸人の道にされい生財
の法は自然のことわりなれば自然
石時の役人を用ひてもとうの生ずるなく
世呼吸を平ずるい美食生死道にして生人を
平ずるい生財の法は昼夜の日の光と夜の
光とを吸ひ吸のなを石と成す思ふ所
かうの祖先の賜にして毒者
するものにあらず所をとなすべし
いかで命の死の流れ所に用ひ

色器之事

色と器とい人のかなめ人の春の名なる
器とれるものはよく色加なれば名の在る

擬たるハ道を知らされハかくのかことし年の生涯
此篇の意ハ心あらしく天日の影の光の声のなく
やまと吟共名の重なる所をかたく知られたり

器械之事

定教撰慮してよく志を為しくすしの為子
の業をうつくへきもしく私情を推度をもつてハ
紹識しくらぬをかくしたる移ひのかの名實表總
いまてら勢よき詩作し有業を備へ事を共
て其志を盛に可せし

山川之事

山は陽の利の形ハ土を地とし理山ハ木を始
うけて水の此水をもちて其ハ水深ちる事をと
封内の山川をまもりてをもつて為るみやハ
可る

利と義との事

利ハ私として木をうるをもていふもする所し
利ハ聖人の罕に言ふしぬ所にて大学の
終りにハ義利をわけし孟子の始にハ義利
をわかち利のみ利まるに利ハ不利の利
害あるをよく潜心玩味すへき事なるへし
為る事ハ高れしもの有る行の書のみを

貴こそ格別の恩義にはこれあるべく事書きこれ上の者共人数の一ツ申上げて天下一ツの威光を以て人の結を結ばしめ長州藩はこれ迄天恩奉しひとり人道の常を守りて以来日毎の時勢代の推移有りを考へきれい何事の成こそこれ迄のものなれば存じ奉り

みなこれ迄の人の口まねひとゆめ行得ざるなれば恩付ひとり人を称す

又ひとつ以前の事ども成ることまたこれまでの所の色彩をもつてのさ様にし

天明六のとし

勝坂屋みおくる

四一笑のうち

明治二巳の年

己巳歩騰る廿第一百

移牧寫の下源定鑑写終り畢

志を薊川藩の婦美

一

志とは同新の事業

志なき人士の心とも成りがたしと雖に
心入る成しなり志定まり行ひ極る
所業事も成就せん一歩をもみ行ふべし
川をこえと志させばその一歩を住をもとひ
志ざしを隔てし山川をこえ海を
渡りすると人の業物の業中に士農民
商上ることのなれい志なり行命記録

かゝい見んやかゝる恭平北代よりはれ
一川の幸ひなれて北美珊のうちふこの業
人は生れて三川乃幸なることに男り
生れ北三川の幸なる四民はうち乃士有
生れて四川北業るれいま学問といひ何と
いひ伝へるもの師もあるものなりひうれ
時ふしもあるさきはは紙とを教へるなら
五川の幸ともいふ命ぜ屋ふるもの

らく業人と生れてその人北人ゐる道を
を立てさるなれくまを切りあるとしてへ
醫者一の藥北法もあるを備より通經
を立てる人とわしひ伝へ先支禮人とか
父母北恩うくこれかくなて
まあるうくさのの人はうちとなるも
恩人毎道伝へる空またる屋理
為去るに辞宜義北そのあるを去

ち善法をもつて世ふなるべきを酔乃うち
のとく孔子もまたまことに善人のとく養
死し給るようその人たちまち因縁ひとと
なりし孔子事小なれども百年に
壽を保川とも百年の法つゆも言人命
くいじかるものもなくいかと欲く孔子事
よあるべし人を活世の年く父母ならう
ロ孝ならて孝といかるべしと立りたとひ一生も

とくるしめたくしまり行るとく元一生も
川のうちなれ死してその法をを第代乃
法もその名をけうひ行ばい祖先への孝
道さ法ないあ新ますさくその人乃人命
乃人行成ちて人毎る道とい角孔乃ば
五常五倫法道成ものり行事を法あなれ
その乃成ものを角毎きみる聖賢行ばり
て法を行ひ者り行る人乃これ言とれく

いやしきとなくこの道中を行へば
人乃職なりそのかりそめいま事
ふく行まて事はかりなわ天地
ゆえ性をうしなひて情欲をあ小
なりを思ふ中ふ行のこまり事
ふ事くこもなき事ばいまの彩こはく
見れ事事はあ行ふ行ふその志ふり
新人ふ寿とそふ人なりわもとも人

なり人ふかりあり松ふなる事はふる所
ばえのふ世志ば原くして行ひふる所
あるるれこの經仏ばくふみてその
義理をふ社日用世を説へふ行世事
ふく行ひ行ふ事ふの日用世をふ
わ表事ふくふ書籍ばふ人ふ
為ふかく説ふこと字ふ中ふ世
上と左義未説ふのふもふ義

理をたゞ川ぬるの方角にて校葉に心を
用ゐるとゝ小屋にさゝそゝ書を学ぶに
毛悔くすゐひつすひらのに出ずとゝい或
学木島獄の名を多識なれい詩をもへば
より志しを遂り悔識の文学まで学ぶむ
屋しひ詩く事小い有仕をはおの了
事に者一仕るを変小度なるとなその
冥成は仕るなりまるく国乃改をあつ

り仕るものさゝ大となく小とれく
学とゝ学とゝ士らその女を学ぶの
く君よりそを職をゆるれい用をる
国の政刑の法り仕しゝ出をし
たいふゝとをひ詩くて代ゝ社盛衰
興廃風俗政法その国の制度文物の
事まして知すれく学ぶ月戸北長を
学なりその書籍ゝ仕るを所長を

く、世間にてものの好むところ所詮世間にて詩
文章なと好よはそのうちにて世間にて
歴史の事好まはそのうちにて世間にて
天文地学なんといふものそ
うゝ紙さたつとむへし経学日用彝倫
事に所長なくかふものいふ人
をしたなれいろわれ人とをもつとをもふ
角しその好に所長なくふへ記事

書籍にむかふ歴史なんとよめはなる如
のごとく解しうる事に元よりわ
うゝこの為にてすべそのとんをはをもへし
おそしはうゝ以ものをしろ求ふはよ
まつ角にあくの書籍はなるに一川の字を
ゝ都者を義とはなる術一事を明亮とも
ゝ川祈ふゝいふ重解はなへ記
をていいうて成就を極只猫看

書籍はいとゆゑに元好きものと
もてはやされつゝ志憤發して好学の
いま講釈するものあり或は経
經文注解をよく解し講釈するも
ありくさくさの仏の解
をなす人は講釈とふ
なり講釈するものあり仏
とともに多くは書籍をひらくこと所

長き志をもてはもむき
もとめへつとめるものいなし
むかしの事なるそのつとむる志を師
なれ志してされつゝ解生者死なん
仏なりわが身は何の所をおもへ
わが道をもわの所を父母はまその祖先
はまもりまもりわが身備り命次と
思育と年を経父母恩深し君の恩

名古屋市立北図書館
1115
55.11.7

あり、それは物の本とする物の花乃まことに
へなものはあるにしてこの人を生れしむへき
人多き道とするふかく問らしたる事さ
あるべき事なり文学もまた
物を武士のよすを花のれしとりハ書ま
とかいまるひ物ゝ七あ子名聞あ市ゆ
いうて所せ所長の恩さ難夢屋花